わが校の紹介

和太鼓を通じて「やる気・根気・元気」の学校

養父市立三谷小学校
校長　西谷博幸

ドンドコドン・ドドンドン「太鼓と言えば三谷小・三谷小と言えば太鼓」というイメージが定着してきました。運動会や卒業式で和太鼓が響く学校は珍しいでしょう。

本校が和太鼓に取組み始めて5年目を迎えます。平成11年10月、竹太鼓・樽太鼓をバチと共に準備。保護者に協力依頼。太鼓の置き台は職員と大工さんの手で完成。指導は旧養父町人材バンクに登録された「あばれ太鼓衆」の指導を受け、また、職員も毎水曜日に特訓を受けてきました。和太鼓指導は、①ものおじせず自信に満ちた子に②やり遂げる喜びを③役割の自覚と協調性を④集中力と粘り強さを⑤家庭、地域との連携をめあてにしています。

太鼓の響きは、児童自らの心にずしりとしみ込み、自らを奮い立たせるのに効果的です。聞く者にとっても勇気と感動を与えます。一体感と連帯感を育成する上でも極めて有効であると思います。

平成12年3月の授業参観日に高学年がデビュー以来、卒業式・石ケ堂古代村祭り・郡P研修会・ふれあいの祭典・淡路花博・養父郡民の集い等々の場で発表してきました。児童には、「やる気・根気・元気」がみなぎっています。児童の望ましい人間形成の一助にするため旧町やふるさと太鼓衆・保護者の方々には多大のご支援・ご指導をいただき今日に至っています。

福祉施設などでの児童の力一杯の演奏活動に多くの方々から感謝と感動の言葉をいただき、児童にとって大きな励みとなっています。

今後も夢と感動のある教育活動を推進していきたいと思います。

窓　感動する夏を

今年も炎天下の中で高校球児が躍動します。勝利して感涙し、敗れて惜涙する光景は、心にジーンときます。そこには言葉はありません。まさに感動する瞬間です。

感動は、人が技する最高の心と心のドラマです。そして、人と人との深い絆がそこに生まれます。

親子で、家族で、グループで、地域で、感動する夏を！

ある父親と小三の息子が山登り体験をしました。暑さと疲れから何度引き返そうかと話し合いました。その時二人は、今、ここで帰ったら、せっかくの今までの頑張りが無駄になってしまう。「ガンバルぞ。」「ガンバロウ。」と互いに声を掛け合い、見事に目的地に到着しました。二人は、思わず「バンザイ、バンザイ。」と歓喜の声を上げ、抱き合いました。親子の感動の一瞬です。家に帰り、再び「バンザイ。」と声を大にしたことは言うまでもありません。（学校教育課）

まちの文化財③

～広谷の造り物～

広谷観音祭りが7月17・18日に行われました。祭りにあわせて6点の造り物が展示されました。

造り物は江戸時代後期にあたる今から200年前に大阪で始まった細工見世物をルーツとする伝統芸能です。全国約50地区で伝承されています。但馬はその中心地帯の一つで江原、八鹿、広谷、和田山、梁瀬で継承されています。

最優秀賞の市長賞は第1組の「琵琶湖満月寺浮御堂」です。竹を材料として、壁や屋根は竹の細かい細工で丁寧に表現しました。趣向を凝らした造り物は「風流の造形」と呼ばれます。

第3組の「米つき水車小屋」は屋根に竹の細い枝をならべ、臼には竹の輪切りを置きました。そして水車に水を流してその動力で実際に杵を上下に動かす細工見世物を作りました。

第9組の「養父市誕生を祝う鳳凰」は缶ビールの空き缶だけを使いました。発泡酒缶の赤ラベルが、鳳凰の顔の表情を大変うまく表現していました。

造り物は近くでみると材料が分かることが重要です。しかし離れてみると実物以上の存在感を示す必要もあります。これを「見立て」の技法と呼びます。

第5組の「養父市丸就航」は、すだれだけで帆船を作っています。こうした一つの材料で作る技法を「一式飾り」と呼びます。

広谷代表区長の片島登久郎さんは「広谷の造り物は山にある自然の竹や木、または空き缶などの廃品を材料として細工を競います。今年は6組で約100人が製作に関わりました。特に今年は力作ぞろいです」と解説しました。

造り物は但馬の夏祭りを彩る街角の美術館であり、伝統文化です。（社会教育課）